



CONTENTS

- アクティブ・ラーニングと大学図書館
図書館長 法科大学院教授
日笠 完治
- 平成26年度公開授業の実施について
 - 公開授業を終えて
法学部准教授 岡田 好弘
 - 平成26年度「公開授業」を参観して
法学部准教授 田中 優企
 - FD公開授業と意見交換会を振り返って
経営学部教授 鹿嶋 秀晃
- 教育改革 ICT 戦略大会に参加して
仏教学部講師 山口 弘江
- FD推進委員会の今後の活動予定

アクティブ・ラーニングと大学図書館

図書館長

法科大学院教授 日笠 完治

少子化時代の課題が徐々に大学にも迫ってくる。様々な分野で日本が世界をリードして行くためには、その能力を十分に備えた学生を育成しなければならない。今まさに、これが大学に求められていることである。そのために、学長を中心とする学内ガバナンスの強化と組織改革（学校教育法改正）、教育手法ないし技術の改善（FD）、「教育の質」の保証と「学生の能力」の保証、情報通信技術（ICT）の進歩やグローバル化への対応、人間力の向上に必要な教養教育ないし建学の精神に基づいた人格陶冶の指導等が政府方針として掲げられている。駒澤大学も総合的な変革と大きな展望、そしてその積極的実施が必要不可欠となっている。

そのような大きな枠組みの中で、教育関連としては「アクティブ・ラーニング」がテーマである。学習過程が、「聞き・読み・書き・話す」の要素からなるとすると、これらの要素を受動的なものから主体的・積極的なものへと転換する方法や機会を開発提案し、実地に移していくが必要になる。たとえば、教育技法でいうと、従来の予習を「Webを利用した授業前配信講義」とし、授業時間はプレゼンテーション、ディベート、双方向・多方向の質疑応答、グループ討論・研究、問題解決学習（PBL）等の主体的学習活動を行わせることとし、授業後にレポートや確認テストを行う形式の「反転授業」などが提案実験され、またその大人教授業での可能性についても研究されている。

図書館としては、これらの状況変化を踏まえつつ、グループ読書室を3室に増設した。本年は、読書を通じて情報発信力（プレゼンテーション能力）やコミュニケーション能力の向上に寄与するための「ビブリオ・バトル」を2回開催した。また、学生が学外の書店に出向いて図書館に必要と思う書籍を選択する「選書ツアー」も実施した。知的好奇心を湧き立てる展示企画にも精力を注ぐと共に、Webで論文等の配信をする機関リポジトリへの積極的取り組み、同時に古典籍等の保管のための地道な努力も続けている。

図書館は、大学における知の拠点である。そして、大学図書館間の連携は密である。少子化時代であっても、有為な人材を育成し世界へ輩出するために、専門的資料の整理保管や閲覧提供だけにとどまらず、丁寧なサービスを心掛けた活動を続けたいと思う。将来的には滞在型の研究学修図書館として、アクティブ・ラーニングの聖地となり、学生が世界に飛び立つためのハブ（中核基地）となることを願っている。

平成26年度公開授業の実施について

平成26年度「公開授業」を以下のとおり実施した。「公開授業」は、授業改善のための教員による相互研鑽を目的とし、工夫に富んだ授業に接し、その体験によるさまざまな発見を通して、今後の授業改善のためのヒントを得ることにある。公開授業は、各学部等のFD推進部会のご協力により、各学部等主体にて実施された。

学部	担当教員	実施日	時限	教場	科目名称	
仏教学部	石井 清純	11/11 (火)	3	禅研-坐禅堂	坐禅	
	熊本 英人					
	村松 哲文	11/28 (金)	2	1-403	仏教美術史	
文学部	寺前 直人	11/27 (木)	4	9-178	考古学特講V	
経済学部	吉田 真広	11/25 (火)	1	9-392	国際金融論 b	
	石川 祐二		3	2研-203	会計史	
	清水 卓		3	9-391	現代西欧経済論	
	鈴木 伸枝		3	1-301	ゲーム理論 b	
	岩波 文孝	11/26 (水)	1	8-360	企業管理論 b/経営管理論 b	
	宮田 惟史		1	1-401	経済学史 b	
	有井 行夫		2	8-255	経済理論 A・資本の原理/ 経済理論 I A・資本の原理	
	北口 りえ		3	8-465	税務会計論 b	
	森田 佳宏		3	1-302	会計監査論 b	
	友松 憲彦		4	8-255	西洋経済史 b	
	小林 正人		11/27 (木)	1	8-255	日本経済論 b
	番場 博之			1	8-465	流通政策 b
	荒木 勝啓			2	8-360	ミクロ経済学
	小西 宏美			2	8-465	ファイナンス基礎 b
	鄭 章淵	2		8-467	アジア経済論 b	
	村松 幹二	3		8-256	契約理論	
	谷敷 正光	3		9-391	教育経済論 b	
	小西 宏美	4		8-257	グローバル・ファイナンス b	
	瀬戸岡 紘	4		1-301	アメリカ経済論 b	
	中濟 光昭	5		8-151	就業力応用IV	
	松田 健	5	8-152	就業力応用IV		
	江口 允崇	11/28 (金)	1	9-392	財政学 b	
	小杉 修二		2	1-404	中国経済論 b	
	山縣 弘志		2	8-151	ロシア・東欧経済論 b	

経済学部	吉田 真広	11/28 (金)	2	8-150	貿易史 b
	友松 憲彦		3	9-392	経済学入門 b
	西村 健		4	8-255	企業経済学 b
	石川 祐二		5	2研-203	管理会計論 b
	曾我 信孝	11/29 (土)	3	2研-209	マーケティング b
	代田 純	12/1 (月)	1	9-391	金融論 b
	姉齒 暁		3	1-303	消費経済論 b
	荒木 勝啓		3	1-302	応用ミクロ経済学 b
	溝手 芳計		3	8-465	農業政策 b
	村松 幹二		4	1-203	制度の経済学
	明石 英人	12/3 (水)	1	9-391	経済理論 Ab
	齊藤 正		2	8-256	現代銀行事情
	堀 龍二		3	8-152	人的資源管理論 b
	小栗 崇資	12/4 (木)	2	8-150	財務会計論 b
	松井 柳平		2	8-152	ミクロ経済学
	石川 純治		3	1-302	会計情報論 b
	舘 健太郎		3	9-392	産業組織論 b
	大石 雄爾		4	9-289	経済理論 B・経済システムの原理/ 経済理論 I B・経済システムの原理
	瀬戸岡 紘		4	1-301	アメリカ経済論 b
	浅田 進史		5	1-203	キャリア・デザイン応用 b
明石 英人	12/5 (金)		2	8-152	社会経済学 b
浅田 進史		4	9-391	経済史 b	
吉田 敬一	12/6 (土)	1	2研-102	中小企業政策論	
百田 義治	12/8 (月)	4	8-466	企業経営学 b	
光岡 博美		5	9-392	社会政策 b	
法学部	岡田 好弘	11/26 (水)	3	8-360	民事執行・保全法
経営学部	豊田 太郎	11/25 (火)	2	8-255	経営学
医療健康科学部	森口 央基	12/2 (火)	1	7-202	医療統計学
GMS学部	服部 哲	11/26 (水)	2	1-401	Web コンテンツ基礎
総合教育研究部	黒住 早紀子	11/25 (火)	5	9-171	教職実践演習 (中・高)
	瀧本 誠	12/2 (火)	2	玉川第2体育館地下・トレーニングルーム	健康・スポーツ実習

公開授業を終えて

法学部 准教授 岡田 好弘

11月26日に「民事執行法・保全法」の公開授業を行いました。3年生からの選択科目であり、法学の基幹科目でもある「民事訴訟法」の発展した科目という位置づけです。

他大学での経験からすると、履修者がそれほど多いことはないというイメージの科目なのですが、本学ではなぜか例年多くの学生が履修登録をしてくれています。

ただ、3年と4年の2学年が履修できるとはいえ、学年定員が300人余の学科で、約300人が履修登録しているのはあまりにも多すぎで、おそらく講義内容よりも水曜の3限という時間割配置の良さなどが原因であると考えています。

履修者の大半は前提知識を欠いているか、あるいは科目内容の習得に前向きであるとは限らないことも考慮し、講義のレベルを維持しつつ、せっかく履修登録してくれた関心の薄い学生を出来るだけ維持するよう工夫できないかと腐心しています。以下では、私の講義運営のスタイルについて述べます。

1.教科書の指定

特定の書籍を教科書として指定しています。できるだけ安価な書籍を指定するようにしています。講義中は教科書のどこの部分について話しているのか、ページ番号などを頻繁に伝えるようにしています。

2.出席チェック

出欠の確認は原則として毎回行います。非常勤講師室備え付けの小さい出席票を講義開始時に配布し講義終了時に回収するという古典的な方法です。配布の際には1人ずつか机ごとに直接手渡しに巡回します。携帯電話等による出席システムは何度か試しましたがうまく行かなかったので現在は使っていません。

遅刻してきた学生には、講義終了時に出席票の端の角をちぎって渡します。学生に心理的圧迫を与えるためです。

欠席・遅刻による不利益扱いはしていません。あくまで学生の出席を促すためです。とりあえず出席し、睡眠や内職しながらでもたとえ10分でも講義を開けば、欠席するよりも教育効果があると考えています。

3.板書・プロジェクト

講義は黒板へのチョークによる板書を原則とします。字が読みにくいとの苦情をよく受けますが、なかなか改善出来ないのが悩みです。パワーポイントなどのスライド形式は使いません。教室によっては投影が見にくかったり、照明を消すと学生の手許が暗すぎたりすることが多いからです。今後は導入を検討したいと考えています。

4.資料提示

資料提示は印刷物の配布を多用します。文字や画像の情報が学生の手許に確実に残るのが望ましいと考えます。印刷が

手間なのと紙資源の浪費が気にはなります。

具体的なイメージを持ちにくいという科目の特性上、資料映像などもできるだけ上映したいと思っており、ときおり映画の一部などの上映や、ネット情報の検索実演をします。パソコン等の準備に手間がかかるので頻繁にはしません。投影が見にくい教室もあるので残念です。

5.私語等への対応

睡眠・内職などは寛大に対応する方針です。私語がひどい時には講義を中断して静かになるまで沈黙するなどの対処をすることにしていますが、本学において私語で講義が困難になったことはなく、この授業などは驚くほど静かに聴講してくれています。



平成26年度「公開授業」を参観して

法学部 准教授 田中 優企

平成26年11月26日(水)3時限、岡田好弘先生による公開授業「民事執行・保全法」(法学部法律学科フレックスA)を参観する機会を得た。同科目は、私の担当科目である「刑事訴訟法」と同様、いわゆる「手続法」(権利や義務などの実現のために執るべき手続や方法を規律する法)と呼ばれる分野に属するものであり、とりわけ興味深く拝聴した。本稿では、当日の授業の概要を紹介した上で、他の授業でも参考になるとと思われる授業実施上の工夫・配慮について示していくこととする。

当日の授業は、指定のテキスト2冊(概説書及び判例解説集:いずれも初学者向けのスタンダードなもの)に加えて、当日の授業テーマ(現況調査に当たっての執行官の注意義務)に関係する近時の裁判例のコピーやインターネットの関連サイトを用いつつ、板書を交えながら展開された。法律学の授業においては、従来からの議論や裁判例はもちろんのこと、直近の裁判・実務上の動向や現状の分析を提供することも欠かせないものであり、そのような配慮が見受けられた。

これに加え、授業実施上の工夫・配慮として、第一に、当日の授業テーマの前提となる知識の喚起方法が挙げられる。以前の授業で説明がなされた知識について、その重要なポイ

ントを指摘しながら学生に喚起させるのであるが、教員が単に再度提供して済ましてしまうのではなく、学生一人一人が自ら喚起できるように、質問の形で問い掛けていくのである。教員としては、一方的に再度提供してしまう方が時間の関係で効率的であるが、知識の定着という点では、学生自らに頭の中で考えさせて思い起こさせる方が望ましいであろう。

第二に、授業テーマを絞って、内容を詰め込みすぎないということが挙げられる。前述した授業テーマについて、その基本となる考え方を示したリーディングケース(最高裁判所による裁判例)を説明した上で、近時の適用例(下級審の裁判例)なども丁寧に確認しながら、学生に考えさせるという形で進められていた。年間の授業スケジュールを考えると、1回の授業に複数の内容を詰め込みがちであるが、学生の理解の程度・様子なども考慮しながら、あえて1つに絞って、その理解を深めさせるという方法も織り交ぜていく必要がある。

最後に、裁判例を採り上げる際に、学生が、その事案の事実関係について十分なイメージを持つことができるよう、適宜、説明を加えていくという工夫が挙げられる。過去の裁判例の事実関係の中には、現在の学生に理解できない事柄が含まれていることもあるため、学生の目線に立った解説が必要となろう。

以上、当該授業の実施上の工夫・配慮について気付いた点を挙げさせて頂いた。私の管見のため、岡田先生が払われた工夫・配慮を多々見落としていると思われるが、ご容赦頂ければ幸いである。

末筆ながら、今回、貴重な機会を頂いたことに、岡田先生に改めて御礼申し上げます。

FD 公開授業と意見交換会を振り返って

経営学部 教授 鹿嶋 秀晃

経営学部では今回の公開授業を豊田太郎先生にお願いした。経営学科1年生400名向けの必修科目「経営学」を2コマ分割した科目である。

当日は、まず片桐学部長から受講生に対して大学がなぜ公開授業を行うのかその意義を説明いただいた上でスタートした。我々は後ろに陣取って講義を聞き、昼休みに昼食を取りながら意見交換会を開催した。

今回FD委員と学部執行部がこの企画を進めるにあたって工夫をした点がある。

第1はなるべく多くの教員が参加でき、かつその後の意見交換会にも出席できるよう2限目の講義を選択した点である。その甲斐もあって公開授業と意見交換会には29名いる教員のうち12名が参加できた。

第2は意見交換会では、各教員が上から目線で授業を評価するのではなく、参加者各々が学んだことを話し合うという

スタイルを意識した点である。豊田先生は教歴10年のベテランであり、そもそも我々が一方的に指導する立場にない。また、一挙手一投足を細かく指摘するやり方では教員のモラルを下げかねないし、それを続けていると次の受け手がいなくなってしまう。私はこの学科主任在任中に、オープンキャンパスの模擬授業で12名の経営学部教員から授業を聞かせていただく場所にいた。そこで一番学んだのは、各先生が個性に富んだ独自の興味の引かせ方、授業運営方針をお持ちでそれが大変勉強になるし、何より授業の進め方を自省するいい機会になるという点であった。話し合いの上でベストプラクティスを共有するというやり方もあるだろうが、教員自らが他の先生の授業に出かけて行って勉強させてもらうというスタイルが元来学究肌の教員にはあっているのではないだろうか。

第3は冒頭にも述べたことだが、大学が組織的に授業改善に取り組んでいる姿勢を学生にも知ってもらうよう努めた点である。「教員の側も一生懸命やっているんだ」という姿を見せていけば、学生に対しても「あなたたちももっと頑張らなさい」と叱咤激励することができる。

さて公開授業の方であるが、今回最も特徴的だったのは、豊田先生の教科書を使った授業スタイルだと思う。理科系出身の教員から1章から順に授業を進めていくのはごく自然なやり方だという意見もあったが、大半の文系教員はこのスタイルに遭遇したのが初めてであった。学生には事前に該当章を読ませておき、当日はそれを前提に授業では補足説明をし、最後に質問の時間を取り、積極的に良い発言や質問をした学生に対してポイントを与えるという参加型の手法を取り入れた授業であった。200名近い1年生をいかに授業に集中させるか、豊田先生ならではの工夫を学ぶことができた。そのせいあってか、後ろの方に座っている学生でも板書以外の先生の発言についてメモを取る姿が散見された。

また意見交換会では、公開授業の話題をきっかけに日頃の授業で困っている問題を相談し合うなどとても良い雰囲気での交流することができた。

連載企画：よりよい教育のために

教育改革 ICT 戦略大会に参加して

仏教学部 講師 山口 弘江

本学で教鞭をとって2年目、初年度とは違う壁にぶつかり暗中模索が続く中、ふと「教育改革 ICT 戦略大会」のパンフレットに目がとまった。そこに躍る「ラーニングコモンズ」「アクティブラーニング」「反転授業」「MOOC」など、昨今の教育界をにぎわす用語に惹かれ、9月4日より3日間にわたって開催された大会の1日目に参加した。ここではその報

告をかねて雑感を述べさせていただきます。

参加した初日は全体会ということで、6つのテーマによる講演ないしは報告発表がなされた。「ICT（情報通信技術）」を掲げる会とあって、先駆的な教育の取り組みが紹介され大いに刺激を受けたが、中でも最も印象に残ったのは、「大学教育に対する卒業生からの改善要望」という3名の若手社会人（教育システム関連の企業就職者）が意見を語る発表であった。その中で、「学生時代には大学での授業に熱心に取り組んだという実感はない」「今、社会人として役立っていることは、アルバイトなど大学教育以外の場で身につけたものだ」との発言がうち2名から続いて出たのである。

このような意見は自分自身の経験からも頷けることではあるが、教育の現場で奮闘する聴衆者にとっては、耳をふさぎたくないような発言であったろう。そのためか、発表後にはその真意を問い直すような質問が寄せられていた。

一方で彼らからは、「社会に出てみて大学で行われる授業内容の重要性を再認識した」「機会があれば学び直してみたい」という意見も異口同音に述べられていた。確かに、これと同様の意見は、本学のオープンキャンパスでも耳にしたことがある。仏教学部の場合、付き添いの父兄には本学の卒業生が少なくない。そういった父兄と面談すると、「学生の頃は授業に興味を持てなかったが、勉強しなおしてみたい」との声が往々にして聞かれるのである。これらの発言からは、卒業生のフォローという面での社会人教育が、今後ニーズとして高まっていく兆しが感じられよう。

さて、結論から言えば、たった1日の大会参加で私の試行錯誤の日々は変わるはずもなく、初日より3日目のICT活用に関する諸報告（本学からは経営学部の青木茂樹教授が発表）の参加の方が具体的な情報が得られたのではとの反省も残った。しかし、若手のうちから意識的にこのような場に参加することは、自身の教育を振り返り、将来の教育の方向性を考える上で不可欠だとの実感を持てた。今後もその思いを忘れず、本学にもこのような取り組みの輪がより一層広がるよう、微力ながら努めていきたい。

編集後記

今年度も公開授業の時期を迎えた。公開授業は、いつもは教壇に立つ側の教員が、学生と同じ机に座り、他の教員から学ぶ貴重な機会である。公開授業は、普段の自分のルーティーン化した授業を見直すきっかけにもなる。筆者の大学生時代と比べて、授業のやり方が多様化している現在、他の教員の授業運営の工夫から学ぶことは大変多い。

公開授業に参加してみると、教員が様々な点で工夫していることに気付かされる。板書のほうが教育効果が高いということで、取って板書を多用する授業もあれば、大講義であっても、学生にネームプレートを配布して学生間のインタラクションを増やそうとしている授業もある。筆者が所属する経営学部では、今年度、豊田太郎先生の「経営学」の公開授業を実施したが、豊田先生の授業では、授業で説明する理論について、適宜DVD（NHKの経済ドラマ『ハゲタカ』）を見せながら、理論と実務との橋渡しをしているそうである。また、授業中、質問に対して発言があった学生には発言点を与えたりと、大講義であっても学生の積極性を高める工夫をされていた。

現在、FD委員会においても今後の授業運営のキーワードとして、アクティブ・ラーニングが議論されている。文科省によると、アクティブ・ラーニングとは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」である。いかに学生の能動的な学修を促していくのかという問題については、すでに各教員が取り組んでいるように思える。今後の課題としては、各教員の授業の工夫や取り組みを共有し、各授業をより改善していく議論を重ねていくことであろう。

（菅野佐織、中濱義章）

【タイトル横の写真は、図書館】

FD推進委員会の今後の活動予定

- 平成26年度第6回FD推進委員会小委員会
平成27年1月28日（水）
 - 平成26年度第7回FD推進委員会小委員会
平成27年2月17日（火）
 - 平成26年度第4回FD推進委員会
平成27年3月12日（木）
- *FD活動についてご意見がありましたら、各学部等のFD推進委員会小委員会委員まで申し出てください。

FD NEWSLETTER Dec. 2014 第41号

発行日：2014年12月15日

発行者：駒澤大学FD推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1

TEL 03-3418-9444 Fax 03-3418-9114

（事務局：教務部）